教授の呟き

第35回

循環型社会に役立つ、品質へのこだわり

東京海洋大学教授　苦瀬博仁

包むか、包まざるか

その昔、多くの商店街に活気がみなぎっていたころの買い物風景を、思い出してみたい。

魚屋なら「おいしいのを見つくろって」などと言いながら、店員に選んでもらった。

量り売りの総菜は、お店の人がシャモジですくって包んでくれていた。対面販売では、顔見知りの店員と世間話をしながら、品質のチェックも商品の小分けも、おまかせだった。

スーパーマーケット（以下、スーパー）で商品を買うようになると、トレーに載せられ、ラップされている魚を、自分で選ぶようになった。ラップの上から魚に触れることもあるが、これも品質を確かめる作業の一つで、仕方ないことかと思っていた。

しかし新聞の投書欄を読んで、はたと気がついた。

「子どもが触って野菜をたたいても親はどこにもいません。桃やトマトだと買う気を失います。またおばちゃんたちが（私もですが）慎重に一つずつ持ち上げて元に戻します。(略)後で買う人のことも考えて買い物をしましょうね」[1]

だれも、他人が指で押した商品を欲しいとは思わないだろう。まして果物であれば、味まで悪くなるようで、買う気も失せてしまう。

商品を美しく包むラップは、直ちに手に取れるよう小分けのためにあるものと思っていた。しかし実は、人の手から商品を保護する最低限の包装という見方もできそうだ。

便利なパック詰め

スーパーの果物売り場には、形と大きさの整ったリンゴやトマトが並んでいる。以前、農協のトマト出荷場を見学したことがある。そのとき数種類の大きさに分類していたから、われわれが日ごろ手にするトマトの大きさも、細かく分類されていることだろう。総菜売り場に回ってみると、おいしそうな空揚げや焼き魚がパック詰めされている。少人数の世帯の増加を反映して、容量はより小さくなっているようだ。

つまめるように切り分けられたパイナップルや、直ちに食べられるパック詰めの総菜セットもある。割高とは思いつつも、便利さと手軽さを優先して、買い求めることが多い。

しかし「買うときに便利なパックも、中身を食べてしまえば廃棄物」という皮肉な見方もある。「ゴミを買っている」と非難する環境保護運動家もいる。便利な商品を求める消費者ニーズが、付加価値を高める流通加工を増やし、便利さの反面で、無駄が増えているとの指摘もないではない。

買うか、作るか

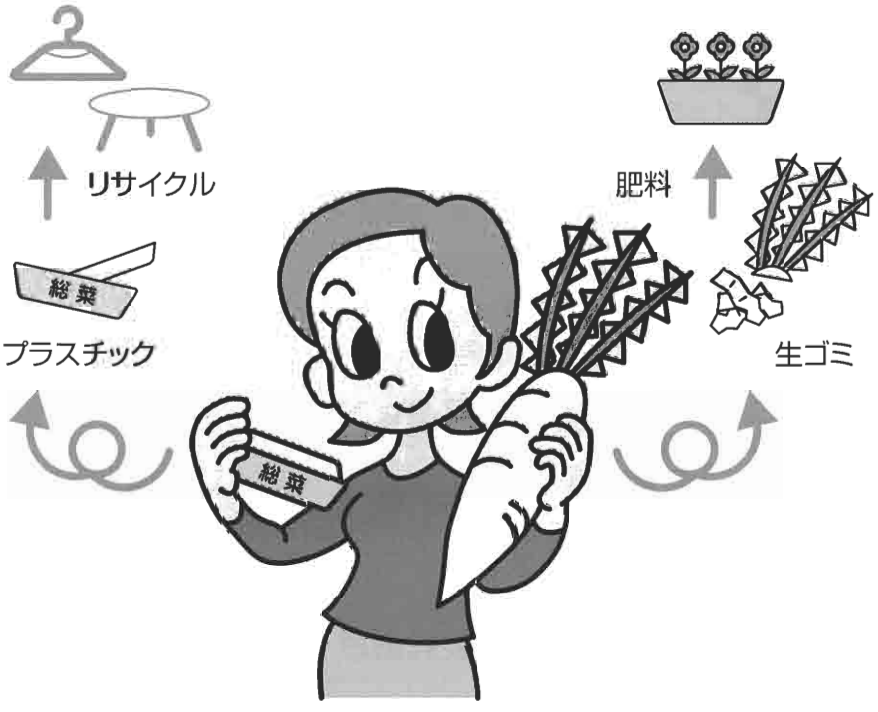
しかし一方では、少し古いが興味深い調査がある。[2]

4人家族が、外部サービス依存型の生活（徹底的に調理済み弁当と総菜を購入）と、家庭まかない型の生活（食材は包装容器の少ない商店街で購入して家庭で調理）を、それぞれ1週間ずつ比較のために実験したものである。

これによると、外部サービス依存型での廃棄物はプラスチックやアルミや紙類などが多く、家庭まかない型ではガラスや生ごみが多かった。合計では、外部型が8647グラム、家庭型が1万1283グラムだった。

実験結果によれば、どちらの生活でも廃棄物は出るということである。

このことは、プラスチックであれ生ごみであれ、それぞれの廃棄物を資源に変えていく知恵や仕組み次第で、どちらの生活も省資源化につながることを示している。どちらかの生活に肩入れした一方的な非難は、慎まなければならない。



驚きの品質へのこだわり

日本を訪れた外国人は、過剰とも思える日本人の品質へのこだわりについて驚嘆する。

暖冷両方を同時に温度管理する飲料の自動販売機、秒単位で運行する電車、2時間刻みの宅配便の配達時間帯指定、製造時刻を分まで示す総菜品、同じ大きさにそろった野菜など。どれもこれも、驚きの対象である。

しかし、これも文化とするならば、このような生活から抜け出すことは容易ではないだろう。品質へのこだわりも簡単に捨てきれないのならば、これを逆手にとった対策を考えたい。

つまり「容器や包装を少なく」という運動に加えて、生ごみ、プラスチック、ガラス、紙、布など、さまざまな廃棄物の再資源化にも「過剰なほどのこだわり（？）」を見せればよいと思う。

生産から消費に至る過程での品質感覚を、きめ細やかな分別収集作業を通じて、消費から廃棄還元へのプロセスにも活かすことができれば、日本人の品質へのこだわりが循環型社会実現にも役立つと思うのである。

（1）橋本道代：「点検しすぎ」、毎日新聞、女の気持ち、2004年9月15日
（2）マンデーニッケイ：「不況でも減らない家庭ごみ」、日本経済新聞、1999年1月11日

Profile
東京海洋大学　海洋工学部
流通情報工学科　教授
苦瀬博仁

（くせ　ひろひと）1951年東京生まれ。73年早稲田大学理工学部土木工学科卒業。75年、同大学大学院修士課程修了。81年、同大学大学院博士課程修了後、日本国土開発に入社。86年から東京商船大学助教授、94年より同大学教授。2003年大学統合により、東京海洋大学教授。副学部長を経て、04年4月より評議員。94年から95年の1年間、フィリピン大学客員教授。04年6月より東京大学大学院医学系研究科客員教授（併任）。主な著書に「付加価値創造のロジスティクス」（税務経理協会）、「都市交通ー都市交通計画・都市物流計画」（丸善）、「マニラ・エンジョイ・トラブル」（論創社）、「明日の都市交通政策」（成文堂）http://www.e.kaiyodai.ac.jp/~kuse/